

---

# 青空になるスタンド使い

Misto

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

青空になるスタンド使い

### 【Nコード】

N1531T

### 【作者名】

M i s t o

### 【あらすじ】

1999年、“未確認生命体4号”によって解決した殺人ゲームその日から、人々は“スタンド”と呼ばれる特殊な能力を、まるで未知なるものから身を守るかのごとく発現させていった。

これは、太陽の戦士の意思を継ぎし黄金の精神を持つものの物語。

この物語は、JOOJOの奇妙な冒険と仮面ライダークウガのクロスであり、同時にパラルールワールド的な作品です。

なので、両作品公式設定ととてもなく違う点がありましても、ご了承ください。

というよりも、最初から“漫画の1巻を手にしたら実は別の作品の最終巻だった”ってくらいに違う設定があるので、許して下さい。

自分は、仮面ライダー作品はクウガしか見てないし、JOOJOに関しては1部、2部はうる覚え、

3部はなんとか全部見たけど、それ以降は4部、5部を掠るほど見ただけで後は見てません。

この作中では、原作登場人物が出ることもあり、作者の心理描写が不確かな場合、原作と違う性格になる可能性が高いです。

それにより、原作と違うが故に不快になる場合は指摘して下さいとありがたいです。多分書き直します。

本作中では、双方の原作のパロディネタ以外でも、他作品のパロディネタを入れている事もあります。

あまり過剰にする心算はないので、気づかれた場合は突っ込みの言葉をこっそりと心の中にしまっておいて下さい。

最後に。

JOOJOはまともに読んでいないけれど、登場人物の“黄金の精神”は尊敬に値すると思っています。

仮面ライダーはクウガ位しか見てないけれど、歴代ライダーの“戦う理由”はそうでない人間が描写するには難しいものがあると思

ます。

だからこそ、それが少しでも表現できるよう努力しますし、何より途中放棄せず書きたいと思います。

ビルの中で、私はモンスターに捕らえられている。だが知っている、これは夢だと。

紛れもない事実だ。だって、この風景は、この状況は過去のもので、今はもう起こりえないものだから。

けれども、この夢をたびたび見るのは、どこかで、この時現れたヒーローに憧れているからだろう。

それを“彼”に言えば、なんだか困ったような顔をしながら、憧れるようなことをしたわけじゃないと言っのだろうけれども。

そして、ガラスを破って赤い鎧のような姿が見えて

目が覚めた。

夢見が悪いとは思わない。

夢の内容はいつもこんな感じだ。

何の脈絡も無くビルに捕まっている自分。それは捕まる前後に気絶して全く記憶に無いから。

赤い鎧のヒーローが現れる少し前に気がつき、朦朧とした意識の中でヒーローが現れたのを見て、また気絶した。

その後暫くして助けられた自分は、両親にそのヒーローのおぼろげな姿を自慢げに語った。

そのヒーローたる“彼”からすれば、多分自分を助けるのが目的で、モンスター 後に知ったが、未確認というらしい を倒すのはついでであれば良かったのだろうと思う。

ただ、状況がそれを許さず、“彼”はモンスターを倒すために、私から遠ざけて、他の人に助けるように求めたのだろう。

この夢を見ると今でも思うのだ。あの時助けてくれたあの人は、“彼”は今どこを冒険しているのだろうか、と。

「まあ、こんなこと考えててもしょうがないよね」  
言って、写真立てを見る。

写真には、青空に向かって親指を立てる サムズアップをしている 自分が写っている。

それと同じように雲一つ無い青空に向かってサムズアップをする。あの時助けてくれた、哀しみを隠したヒーロー。過去、未確認4号と呼ばれ、今はどこからともなく“クウガ”と呼ばれる彼に向かって。

“未確認生命体” 別名“グロンギ族”による殺人ゲーム事件が終結して、世界は様変わりを始めた。

初めは、数人が“奇妙な現象”が起きるのを目撃したり、“奇妙な物体”を目撃するようになっただけだった。

勿論それはすぐさま未確認と関係があるのではないかと騒ぎになったが、“奇妙な現象”はともかく、“奇妙な物体”に関しては誰も信じなかった。

何せ、それが見える人間がごく少数で、実際に見えると言っているその瞬間にも、他の人間には見えない状況だったのだから。

しかし、徐々に“奇妙な物体”を見る人が増え、更には“奇妙な人影”の目撃情報まで出るようになった。

そんな時名乗りを上げたのが SPW財閥。  
SPW財閥の動きは実に素早かった。“奇妙な人影”を“スタンド”と名付け、その人影は、物体は(Stand form ind) 精神の現れであると発表した。

そんな奇妙奇天烈なことを信じるものか！そんなオカルトチックなものこの世には存在するはずが無い！！

名立たる学者は挙ってこう主張したが、人々はSPW財閥の発表を信じた。そして受け入れ、紛れもない真実であると確信したのだ。

無理も無い、“スタンド”が特定人物にしか見えないものであった時期であるなら、こんな世迷いごと受け入れられはしなかっただろう。

だが、SPW財閥の発表以後も“スタンド”が見えるようになるモノ、発現するようになったモノは多数存在した。

そしてついに、“スタンド”が見えない人間のほうが少数派になつてしまったのだ。これでは、“スタンド”は存在しないと言うには無理な話だ。

当然、こうした能力の発現に関しては様々な憶測が飛んだ。SPW財閥の発表においても、飽くまで推測、といったレベルでの説明しかなされなかった。

曰く　この地球において発生している様々な不可思議な事件が波紋を呼び、それが能力発現の引き金になったのではないかと。

当時はこの発表に対しても、賛否両論あつたものの、最近では落ち着いている。

蛇足だが、この説明を信じている人間は多数存在している。“不可思議な事件”に間接的に遭遇したり、直接的に遭遇して被害にあつたものはSPW財閥が想像していたよりも遥かに多かつたのだ。

特に、日本においては、未確認生命体による殺人ゲームが起きて間もない時期であつたこともあつて、“不可思議な事件”が他人事ではすまない人間が多かつた。

だからなのか、それとも他の要因があるからなのかは不明だが、“スタンド”の発現率は全世界中日本が最も高かつた。他の国よりも圧倒的に、群を抜いて。

他の国では、多くとも100人に70人程度にも拘らず、日本では100人中99人程度のグループが珍しいといえるほどの呆れるような発現率であつた。

とはいえ、“スタンド”がどのようなものか正しく理解するものは非常に少なく、発現しても滅多に活用せず、拳句発現していることすら気づかない人間が多数を占めていても、別にそれは誰を攻め

る理由にもならない。  
それから、更に数年の後

彼、一条薫は驚愕していた。

未確認と言われた、グロンギ族との戦いで未知なるものとの遭遇には慣れていた心算ではあるし、余程のことがなければ驚愕のあまり放心することは無いと思っていたのだが……

しかしながら、彼が、いや彼らが今目の前にしているものを見れば、放心するな、と言うほうが無理であるのかもしれない。

彼らがこのような事になる時から遡る事ほんの僅か、彼の所属している長野県警警備課に一本の電話が入った。

『スタンド能力者同士が暴れて、近隣住民に危害が及んでいる』と。

故に、いつものように出勤し、“スタンド”能力が使える者で“スタンド”に対応し、そうでない者は使い手の方と直接対峙する。

そう、この時までには誰もが思っていたはずなのだ。

いざ事件現場に赴いて、目の前の存在を見るまでは。

能力者の間に入り、スタンド使いのみならず、“スタンド”自体に対しても攻撃を加えないよう細心の注意を払い、なおかつ周囲に被害が及ばないよう戦う赤い戦士。

彼は、知らず言葉を漏らした。

「五代、なの……か？」

しかし、そんなはずはないと一条自身一番良く解っていた。

あの未確認生命体第0号との死闘の後、“彼”は外国へと旅立った。

それでも、稀に電話をかけてくる“彼”に、呆れたようにしながらも、笑えるようになったのだなと安堵しながら対応していた。

友人であり、“彼”のかかりつけを自称している医者である椿か

ら相談を受けるまでは。

あいつな、今でも夢に見るんだとよ。第0号との戦いのこと。未だに、手から殴った感触が拭えず、時として夢の中でも未確認生命体と戦っているのだという。そして、飛び起きて、酷い時は吐く事もある。

茫然自失としながら、どうにかこうにか家路につき一人になって泣いた。誰に憚ることなく、申し訳なさと、不甲斐なさで、泣き続けた。

誰よりも笑顔が似合い、誰かの笑顔だけを望んでいた“彼”の笑顔を奪ってしまった。それが簡単に戻ってこようはずが無いのに、表向き平然としている彼の演技で大丈夫だと思ってしまったのだ。

その話を知っているから、“彼” 五代雄介 がその戦いの舞台となった日本、特に長野に足を踏み入れることが出来るはずが無いと解っていた。

だが、どこからどう見ても今見ているのは“彼”の代名詞でもある“未確認生命体第4号”こと、“クウガ”だ。

日本で、アークルやアマダム クウガに変身する際必要なベルトであり、霊石の名称 が発見されたと言う報告はあがっていない。

ならば、今見ているのは何だと言うのだろうか。

“スタンド”であるのなら、使えない自分が見えるはずもないし、“スタンド”でないのなら、一体何者が“クウガ”になっているのだろうか。

それでも職務を全うしようと、“クウガ”を一応の協力者(?)として、この場を収めようと勤めたのはやはり過去の経験のおかげであると言えよう。

二人の能力者を逮捕し、いざ“クウガ”に注意を向けてみれば、“クウガ”の鎧を纏ったまま、頭の部分だけ変身を解いていた少女がいた。

この辺で、一条は考えるのを止めた。というのも、彼には、少女

に面識があつたし、“クウガ”の正体に見当がついたからだ。

彼女は当時まだ未確認生命体の殺人ゲームが行われていた最中、ゲームの対象となつて殺されようとしていた。

それを助けたのは、当然一番矢面に立っていた“クウガ”であるし、その“クウガ”が自分に彼女を託したのだ。

そして、未確認生命体の手により身寄りの無くなつた彼女を気にかけていたのは“彼”だった。

“彼”が外国へ渡り、その後暫くして“スタンド”が発現するようになった彼女は、それまで“いつかクウガみたいになりたい”と言つていたのを止め、不思議なくらいの変化を起こした。

曰く、女性版五代雄介、と言われるほどに戦いを嫌い、底抜けに誰かの笑顔を喜び、そのために技を身に着けるようになった。

だからだろうか、自分は目覚めていないからなんともいえない面があるが、“スタンド”が心の現われであるというのなら、その彼女の心の現われが“クウガになること”というのもなんとなく納得してしまえた。

同時に、戦いが嫌いなのに戦う力に目覚めるとは、なんと言う皮肉だろう、とも思ったが。

「あ、お久しぶりです。一条さん！」

その言葉を聴いて、一条は非常に頭が痛くなつた。

何だろう。自分は“クウガ”に奇妙な縁があるのだろうか。

しかし頭部だけ少女で、そこから下が非常に非常に見慣れた“赤のクウガ”の姿というのは、なんとも形容しがたい空気をかもし出していた。

「全く、君は一体何をしているんだ」

どうにか口に出来た言葉がこれだけだつたとしても、“五代雄介”という人間に対する思い入れが非常に強い一条に責め苦をいえる人間はいない。

それほどまでに、あの空間で一条薫という人間に対して“クウガ”という存在が与えた様々なものは大きかつたのだ。

しかもよりもよってこんな暴力沙汰が起きている空間に自ら望んで飛び込むような事をしていた。

だからだろう、一条は自分でも自覚できないうちに言葉がきつくなっていたし、切羽詰っていた。

「え？何って……あのままだったら、皆危ないなって思ったから」そんな中、彼女の言った言葉は一条の切羽詰っていた心にさりげなく、しかし深いところまで染み込んだ。

まるで、“五代雄介”という人物が目の前の少女の体を借りているかのような錯覚まで覚えた。

そして理解した。彼女は、本当にあのままだと危ないから飛び込んだだけだと。あのままだと、誰かが傷ついて、笑顔がなくなるから、そうならないために動いただけだと。

付け加えて言うなら、彼女の言う“皆”とは、暴れていた当人たちも当然のように含まれている。この点が、知る人からは別名“五代二世”とも言われる所以だろう。

それが分かれると、先ほどまで抱えていた形容しがたい数瞬前のものとは違い、剣呑としたものだが感情が引いていった。

そうやってようやく自覚できた暗い感情は、一条を不快にさせた。「大丈夫です？なんか、顔色悪いですよ？」

それは、思いのほか長かったのだろう。いつの間にか、完全に変身を解いた彼女が俯いた一条の顔を覗き込んでいた。

それに驚いた一条は悪くない。最も、彼女が美少女でなければ、周囲から妬ましいいやら羨ましいいやらといった目でも見られることは無かっただろうが。

「い、いや、問題ない。一応、協力感謝する。だが、事情が事情なだけに調書に協力してもらう必要がある」

「あ、はい。良いですよ。元々その心算で止めに入ったわけですから」

この辺りの言動に、自分が完全にクウガの姿をしているからとか、

“クウガの姿をしたスタンド”を使っているからという考えは……  
全く無い。

ただ単に、今の状況を見たら事情聴取を受けないとダメだろうなあ  
あとしか思っていない。どうも、“クウガ”というものが人に与える  
影響が分かっているようである。

この辺で想像できた人間もいるかもしれないが、事実これから先  
も分からないまま、一条を振り回す彼女がいるわけではあるが……  
今現在の彼は知らなくて良いことだろう。

「ああ、そういえば」

実に今更ではあるのだが、と実に意味深な前置きをして神妙な面  
持ちで一条は切り出した。

「君の名前は……何と言うんだったかな」

その時、彼の言葉を聞いた人間は皆一様に『あんな親しげに話し  
といて名前も知らねえのかよ！』と心の中で突っ込みを入れながら  
ずっこけたことを明記しておく。

一条薫。彼は、自覚していないが、生来の熱血感と五代雄介特有  
の空気に当てられた結果……若干天然成分が発症してしまっている。  
その事を、彼に言おうと思った者は 誰一人いない。

登場スタンド：“赤い鎧の戦士（クウガ・マイティフォーム）”

本体：???（作中にて名前が出ていないため）

スタンドタイプ：特殊型

スタンドパラメータ：

破壊力 - C    スピード - C    射程距離 - なし    持続力 - A    精密機

動性 - B    成長性 - A

能力：

能力者の内に宿り、“変身”させることの出来る能力を有する。

そのため、スタンドタイプ上装着型、一体化型、物質同化型の要素を持つているようなスタンド。

ただし、“変身”した姿がスタンド使い以外にも視認でき、実際に“変身”に必要なのが肉体である以上、人体と同化している物質同化型とも言える。

また、能力が“変身”であるため、必要に応じて複数形態に“変身”することが出来る。

必殺技：

マイティキック    威力 - 1t程度

あとがき

はじめから、色々大変なことをしでかしているのを自覚しながら書きました。

それでも書きたかった。反省はしてない。

あと、何か無理矢理な設定があるのは結構分かっていますが、出来るだけクウガの製作理念に外れないように気をつけたらこんな方向に

……

ホント、どうしてこうなったんだろう。

一条さんの性格が若干壊れてるのはわざと。五代病感染者だから、仕方ないね。

スタンド使いなのになんで変身ヒーローっぽいのか？

仮面ライダーだし、クウガだからね、仕方ないね。

それと、実は二日前くらいにはこれ完成してたんだ。

登校しなかった理由？主人公の名前と良いタイトルが浮かばなかったから。

“第〽話”みたいなものの代わりに“Mind”としたのは、

PS版J O J O 3 部格ゲーのバトル前のシステム音声が“Make Your Mind”だったから。

5 / 1 3 修正。

スタンド使いが世界的に多数派になったなら100人に対して最低51人必要だろうに、100に対して1とか……死にたい。

1st Mind Date et dabitur vobis  
(与えよ、さらば与えられん) - 2

所変わって、現在長野県警への道中。

一条薫は少々不機嫌な顔をしつつ、その後、周囲の人間から色々言われ、しかも何故言われたのか全く理解していない為である車を運転していた。

横では、「私パトカー乗るのって初めてなんですよね！あ、でもこれ覆面パトカーって言ったほうがいいのかな」なんて暢気な言葉を発している少女が乗っている。

あの発言の後、多少不機嫌ながらも「音城おとしろ 詩桜しおう」という名であると自己紹介を受けた。

同時に、名刺を差し出された。一条にはどうしてもその動作が、やはり“五代雄介”という人物とダブって見えてしまった。

思いを馳せていたのは不振がられない程度だったようで、更に脳裏に思い出が過ぎる前に名刺を受け取って、見るんじゃなかったと思っ

思った。

そこには 夢を叶えるために いつか2001の技を得て青空を追う女

音城 詩桜

と書かれていた。

1999の技。それら全てを見せてもらった事は無かった。だが、その全ては誰かの笑顔のためで、けして戦うためじゃなかったのに。そう思っ

て、空を仰ぐと夕日が空を紅く染めていて、有難いのか腹立たしいのか分からなくなった。青ければよかったと思う反面、青くなくてよかったと思う気持ちもあった。自分の心が、どうしようもなく分からない。

そんな不安定な気持ちを、彼女を乗せて運転している今現在も、  
一条は抱えていた。

この気持ちは、“五代に対する罪悪感”なのかもしれない、と彼は捉えていた。

その考えは正しく当たっていた。それも、警察官として、友として、その両方の意味で。

「君は、俺を どう思っている」

だからだろうか。深く考えもしないで、そう切り出してしまっていた。

“五代”に限りなく近いような感じのする彼女なら、良くも悪くも何か変えてくれるような気がして。

「えっと、どうって言われてもなあ……あ、そういえば」

思い出したかのような顔をして、真剣な顔をして一条を見る詩桜。さも私怒っています、といった表現が正しい顔をして、

「五代さんに頼まれたから、偶に来ますって言って、偶にどこるか、全然来てくれませんでしたよね」

自分が想像していたこととは違う答えが返ってきた。

だが、彼女は自分よりも若い。そんな彼女に期待している自分が、間違っているのだろうか。

そう考え直して、運転に集中しようとして

「一条さんが五代さんのこと気にしてるってのは、アレだけでも十分分かりましたけど」

不意を打ったかのような言葉に完全に正体が知れぬ状態になりながらも、それでも何とか路側帯に不自然ではないように停車できたのは奇跡といえる。

何故、そう言おうとして彼女を見ると、自分を見つめられていた。見透かされているような気がする。変身なんてしていない。彼女の“スタンド”には変身以外にも、人の心を読むことが出来るのだろうか。

「予め言っておきますけど、私の“スタンド”は変身する能力以外

には持っていないせん」

「だったら何でこんなにも俺の思ったことが分かるんだ！そう叫びたい気持ちも、見つめられていると抑えられてしまった。」

彼女のほうから視線を外してくれた事に安堵していると、彼女は大きくため息を吐いて、

「言っちゃえば簡単なことですけど、私が五代さんを連想させるようなことをした時だけ、固まったり変な顔してました。」

クウガの格好見てるときもそう、私が自分から事件に飛び込んだのを咎めるときも、名刺見せたときも、何か泣きそうな顔をしてました」

よく見ているなと思うかもしれないが、これは彼女の夢を叶えるために必要であるが故であり、彼女にとってしてみればこの程度造作も無いことである。

相手を笑わせようと思うのなら、何故笑えないのか、何故笑わないのか、それを読み取れなければ、分からなければ何をやっても空回りに終わるだけだからだ。

一見すれば、ぼやっとして、物事を深く考えないように見えて仕様がなないが、その裏では深い思慮がなされている。

そんな背景があるからこそ、彼女が一条の考えていることを、あれだけの短い時間で推察するのは難しいことではなかった。

勿論、一条がたまたま分かりやすい反応を見せていたというのものもある。そうでなければ、こうも簡単に見抜くことは出来なかった。

一条も、もう見抜かれていると観念したからか、こんな言葉を漏らしてしまった。

「彼は……五代は、俺を許してくれるだろうか」

詩桜はため息をついた。別に一条に呆れているからではない。余りにも似ていたからだ。

尊敬する、五代雄介に。

彼女も、時折彼から電話を貰うときがあるが、決まってこういうのだ。

“一条さん、俺のこと怒ってないよね？”と。

怒る理由があるのか、と問うと、椿さんには未確認のことで悩んでいるのに、一条さんには問題ないように振舞っていたのが椿さん經由でバレたかららしい。

おまけに、嘘をついたのがすごく申し訳ないから、聞くに聞けないような状態であるらしい。

確かにこの二人は未確認との戦いで、深い絆を結んでいる。それは分かるし、互いが互いを思いやるのも悪いとは思わない。

だが、過ぎればそれは時に相手も自分も悪い方向にしかもっていけないものだ。それを詩桜は理解しているが故にあえてきつい言葉を放つことにした。

「私は、五代さんじゃありませんよ」

詩桜の考えとしては、一条が自分で五代に聞くべきだ。そう結論付けている。勿論、或いは五代が一条に尋ねる、というのもあるが、当然五代のことだ。笑えなくとも、出来る限り笑って見せて“許すも何も、俺怒ってないですよ”と言うと確信している。

また、一条も五代の言葉を聞けば、“心配はしているが怒っているわけがないだろう”と答えるのも確信している。

その後どうせ二人して決まりが悪くなったような顔をするのだ。

と、詩桜は二人と長年付き合っているのかと思わせるほどにあっさり結論を出した。

だからこそ、あえてどちらかが一歩踏み込む必要があると思った。「それは、そうだが」

未だに決めかねる一条に、詩桜はため息を吐きかけて、止めた。いつだったか、両手が義手になっている黒人の男性に、タロット占いをしてもらっている最中に言われたのだ。

『ため息を吐くとその分幸せが逃げると言う。迷信かもしれないが、そういう迷信にも意外と先人の知恵が詰まっている。』

騙されたと思って、少し気をつけてみてくれないか？占いの私が言うのだから、少しは説得力がある、と信じてくれないかな？』

別に一笑に付すことも出来たのだが、何故だか馬鹿にしてはいけない、そう思わせる何かを感じた。

まるで、大きな道筋から、不本意にも無理矢理弾かれたような、そんな雰囲気を感じたから。

だから、時として周りから見れば不自然に見えるような、ため息を吐こうとして途中で止めるなんていうクセが出来てしまっていた。先ほどのように、漏れてしまつときもあるが。

ちなみに、占いの内容は全く覚えていない。当時はタロット占いなんてものすら知らなかった彼女に、かなり専門知識も交えた解説を理解しろと言うほうが無理な話だ。

「遅れてしまったな。すまない、問題の無い程度ではあるが、多少スピードを出させてもらおう」

暫く後、何か思いつめたような顔で一条はそう言い放った。

返事は聞いていない、そう言いたげにアクセルを踏んでいる。

何か変な方向に考えが進んでるんだろうな、と思いながらも、口を挟まないほうが良いと詩桜は決めた。

音城 詩桜は、誤解を受けやすい人物である。

彼女は、自分の夢は“皆の夢を見ること”だと臆面も無く言うのける。

だと言うのに、彼女は時としてキツイ言葉を発する。助けを求め  
る手を、あえて突き放す。

遠めには、それをどう鼻眞目で見ても、とてもではないが“笑顔  
を見たい”といている人物であると思うことが出来ない。

しかし、詩桜に近い、または親しい人物からは、“お人好し過  
ぎる”と評される。

この評価が分かれる原因として、一つは詩桜が“優しすぎる”と  
いう点にある。

時に、自分の身内にすら苦言を呈すことが難しいのに、家族でも、友人でもない、赤の他人のために、あえて苦言を呈すことが出来る。真にその人のためになるのはどうすれば良いのか、それだけを考えた結果として、時としてあえて突き放す。

その後こつそりと、バレないように見守る。手を貸さないほうが良いと判断しても、外れるときもあれば、他のことが原因で、悪くなることもあるから。

自分の出来る範囲で、ほんの少し無理をして、時には人の力を借りながら、他人の目も気にせず。

何故そこまでするのかと問われれば、サムズアップをしてただ一言。

「笑顔が見たいから」

けれど、彼女は自分が“五代雄介”ではないし、“五代雄介になる”気もない。

ただ、自分が生きる道をどうするかと考えたときに、目標とする人物はやはり“五代雄介”である。

“彼”とは違う、自分なりのやり方で、誰かの笑顔を見る。誰かの笑顔を曇らせないようにする。

そんな考え方をする彼女だから、一条を案じてなお口出しをするのを堪えた。

だからこそ、多少余裕の無い一条に対しても全く不快な気持ちを抱くことは無かったし、寧ろその状態でも職務を全うすることに感嘆すら覚えた。

『一条さんはね、すっごい真面目なんだ。だけど、もう少し肩の力を抜いたほうが良いと思うんだよなあ』

以前、五代雄介がまだ未確認との戦いをしている最中、詩桜に一条の人物像を一言で説明したときの言葉だ。

そんな事を思っているから、詩桜が苦笑して、それを見る一条が若干訝しげな表情をしながらも、実にスムーズに事情聴取が進んだ。それでも、終わった頃には辺りはすでに暗くなっていた。

詩桜は聴取に応じる前に、家に帰宅前に事件を目撃して警察に事情聴取に行く、と連絡していたので、遅くなっても問題は無いだろうと一条が判断したときだった。

なお、息をするかのようにあっさり嘘を吐く彼女を見て、実に手馴れていると感じたと同時に、それだけ首を突っ込んだことがあるのだろうと思いい頭が痛くなった。

「あ、一条さん。送ってもらっても良いですか？」

一瞬、スタンド能力使えば良いじゃないかとも思ったが、冷静に考えてみるとダメだった。彼女のスタンド能力は“クウガ”に変身することなのだから。

未だに“未確認生命体4号”として忘れ去られることの無いクウガ。それと同じ姿になって世間を騒がせて、その理由がよりにもよって帰宅するためなど、一条には耐えられそうになかった。

とはいえ、独断で動くのは流石にまずいと判断できるようになったのか、上司に事情を説明した後、詩桜を送るようにしたのは、恐らく時の流れ以外にも要因はあるだろう。

そんな理由から、一条は詩桜を送るため、車を走らせていた。

詩桜は、たとえば表面上実にリラックスしている表情をしていたが、内面は頭を限界ギリギリまで動かしていた。

どんなにキツイ言動をしたとしても、結局の所“音城 詩桜”という人物の本質はお人好しであることには違いない。

だから、彼女の頭の中を駆け巡っていたのは、どのようにして一条と五代が会話できるようにするか、であった。

それに集中する余り、一条に声をかけられて携帯電話が鳴っていることによく気づく。

発信相手は 五代雄介。

なんてタイミング。都合が良過ぎる位だ。そう思いつつも、電話に出る。

「はい、音城です」

今一条と一緒にいることを伝えたら、どれだけびっくりするだろう

う。

だが、驚いたのは自分だった。

『詩桜ちゃん？……あのさ、俺……日本に帰ることにしたよ』

どこか、未だ憂いを残しながらも、彼はそう強く言い切った。

『一条さんにも会う。椿さんにも……桜子さんにも。まだ、ちょっと辛いけど、笑えるようになったから』

擦れるように、大丈夫なんですか？と聞いた。

すると、大丈夫。そう返ってきた。何故だろうか、涙が出てきた。横で一条が驚いているが、だからと言って止められるものではない。

電話から、泣いている詩桜を心配する五代の声、その声の主に気づき何をしたと問い詰める一条。

ぐずる声で、しゃくりあげながらも、五代は悪くないと説明をする。

その内容に、一条は腹を決めたように電話の向こうの相手に対して言い切った。

「俺は、君に言いたいことがある。言わなければいけないことがある。だから……待っている。五代」

「俺も、言いたいこと、言わないといけないことがあります。だから、待っててください。一条さん」

ならばこれ以上は二人に言葉は要らないと、一条は携帯を詩桜に返した。

その表情は、たまらなく晴れ晴れとしていた。

『じゃあ……大体1週間後くらいかな、多分それくらいに長野に着くから……』

「はい」

そして電話が切られた。

「五代は、やっぱり五代……だな」

一条は素直に頭に浮かんだ言葉をそのまま出した。

「そうですね」

詩桜も、それに賛同した。

「さあ、1週間、五代が帰ってくるまでに知り合いに連絡をとらなくてはな。」

それに、この決心を鈍らせないようにしないといけない。長いよ  
うだが、なんだかやらないといけないことに比べたら短いな」

一条の顔はそれをとでもではないが苦しめたような表情ではなく、  
まさに親友に会うのが楽しみな、そんな顔だった。

1週間。本当に短い1週間だ。今まで年単位で待っていたのに、  
今更待っているのがたった1週間。

だというのに、一条はその1週間がきつと、五代と共に過ごした  
時のように、とても長い1週間になるに違いないと確信できた。

五代雄介、日本帰国まで 後7日。

あとがき

今回話に出てきた黒人男性は、分かった人には分かったことでしょう。

この世界のブ男さんは原作同様にガオンの餌食で生死不明です。今回出てきたブ男さんは、原作世界に限りなく近いけど、この世界に飛ばされちゃったブ男さんです。

ヴァニラさん原作でも言ってますからね。“どこに通じているかは知らん”って。一応死ぬとも限らないんじゃないかなと。

まあ、両腕吹っ飛ばされて生きてんのかよ、とかいうツツコミ禁止え？他2名？原作同様死亡確認されてます。そこまで原作改変する気は無いので。

実は、今回の話、詩桜が五代に連絡を取るという形も考えたのですが、不採用。

理由は五代が自分から動くと言う風にしたかったから。あと、それやっちゃうと詩桜がとんでもキヤラになってしまうので、その防止携帯持つてるから、出来なくもないでしょうけど、一人の人物がなんでもやっちゃうのって何だか違うような気がしたので。

まあ、五代にならぶん投げてもいいってもんでもないんだけど……問題なくなったら、本当にあれこれ投げてても大丈夫な気がするから怖い。

あ、それから多分五代クウガが出ることはないかなと。だって二代目クウガいるし。スタンドだけ。未確認も出す気はないし。

バトル見たいって？クウガにバトルばつかを要求しちゃダメだよ。1回もやってないけどね。

最後に。感想もレビューも無くていい。評価してくれてありがとう。

1st Mind Date et dabitur vobis (与えよ、さらば)

1st Mind Date et dabitur vobis  
(与えよ、さらば与えられん) - 3

数日が経った。

その間、変わったことといえば一条薫はより精力的に仕事をこなすようになって、音城詩桜は少し明るくなったこと位だ。

更に付け加えるなら、一条經由で五代の帰国を伝えられた人物は皆複雑そうな声をしていたが、それでもどこか嬉しそうであった。

さて、話は変わるようだが、音城詩桜は当年を持って15歳である。

義務教育の期間は終えているため、就労していてもよいが、高校に通っているため、学生という身分になる。

五代雄介が帰国するまでの間、別に長期の連休があったわけでもないため、登校する必要があった。

その間、詩桜にとっても五代雄介帰還の報以外にちょっとした変化があった。

(なんていうか、未だに慣れないなあ、これだけは)

登校するたびに、詩桜は蔑視される。それは、詩桜が“スタンドを出さない”ことに起因する。

詩桜はスタンドが出ないということにしてある。両親にも内緒だ。見えるけど、出ない。

スタンドがほぼ一般的になった際に、教育カリキュラムとして“スタンド”の訓練も含まれるようになった。

詩桜が一番にスタンドを使えないふりをしようと思ったのは、これが理由だ。

“クウガ”の力は誰かを助ける時に使う。もし、誰かを傷つけるのだとしても、“クウガ”でなければならぬときにしかならない。

それが詩桜が“スタンド”に目覚めた際に自身に誓ったことだ。訓練とか特訓とか、そんな名目があったところで、詩桜はそれを理由にしておおっぴらに変身しようとは思わなかった。

だったら、スタンド自体目覚めていないことにすればいいかも、と思ったが、見えているものを見えないように演技するのは難しいと判断して切り捨てた。

結局、見えているが使えない、そんな中途半端なスタンド使いとして、詩桜は蔑視される存在となった。

(助けたら助けたで、何か知らないけど睨まれちゃうし)

助けた報酬がほしいなんてのは全く思わないが、やっぱり助けてもらったら御礼を言うのは大切なのではないかと考える。

だというのに、詩桜が手助けした結果返ってくるのは常に批判の眼差しだったり、誹謗中傷だったり、拳句教員からも余計なことはするなと言われる。

だからと言って、困っている人を見捨てるなんてことができる性分ではない詩桜であるからして、やっぱり手を貸してしまう。

その結果、高校入学1か月足らずで、スタンドが使える人間からは侮蔑され、使えない人間からはゴマ磨り女と言われるようになってしまった。

(あー、一条さんに会いたい)

厳密に言えば、一条でなくてもよいのだが、少なくとも自身を理解してくれる人物に会いたいと思っているのは確かだ。

その中で、比較的会いやすく、相談に乗ってくれ、頼りがいのある人物となると、詩桜の頭に即座に出てくるのが一条であった。

彼の周りには、スタンドが使える使えないなんて些細なことで差別するような人間はいない。

彼らは、人間より暴力的な存在を知っているし、同時に人間に対して一番残酷になれるのは、時として人間であることを分かっているから。

それは、五代雄介という人物が残した、無形の遺産ともいえるよ

うなものだった。そこに負の遺産ともなるようなものがあるのは、人の業を感じさせてならないが。

日は変わり、五代雄介帰国まで後5日。その日詩桜は校内で困っている生徒を見かけた。

「どうしたの？」

困っている人は助ける。睨まれるのは嫌だなあと思いながらも、見過ごせないため、つい声を掛けてしまった。

相手は詩桜の事を知っていたのか、露骨に嫌な顔をして、助けなんていらなうと言って、足早にしかし足元を注意してみながら去っていった。

（助けは要らない、なんて言われてもなあ。本当に困ってるような感じで、何か探してますって雰囲気したら、放っておけるわけないじゃない）

詩桜の見る限り、その生徒は去り際にも地面を探しながら去っていった。

となると、落としそうな物で、足早に去っていったことを考えて、地面に落ちていたら目立つものとみて良いだろう、とあたりをつけた。

一条さんが聞いたなら、呆れた顔をするんだろうなあ、と思いながらも、感覚を研ぎ澄ませた。

クウガをスタンドで再現するという能力は、別に完全に变身しなければ使えないわけではない。

完全に引き出そうと思えば变身する必要があるが、引き出す能力を弱めることで外見に一切の変化がないままにその力を使うことができる。

今回使うことにしたのは“緑のクウガ”の力。完全に引き出せば、長くても1分が限界だがこのように使えば1時間はもつ。

とはいえ、元々がスタンドで再現しただけのものであるため、変身したとしてもその能力は本物のクウガと比べるまでもなく劣っているのだが。

それでもただの落し物探しに用いるだけならば十分すぎる能力である。勿論、これがバレれば何故あっさり見つけられたのか問い詰められるので、流石に隠れて探しているが。

（さて、見つけたのは良いけど、本当、どうしよう）

暫くして見つけたのは、携帯電話だった。色々ストラップやらがついていてデコレートされていて、そのせいで詩桜の持っている携帯に比べて妙に重い。

見つけた場所も、詩桜が生徒を見かけた場所から離れた、体育の授業で使う用具の入っている倉庫の中。

その生徒がなんとか鳴らしたのであるうコール音も緑のクウガの力を使っていなければ聞こえなかつただろう。

たまたま、体育の教員が鍵を閉め忘れていたのか、無理やりこじ開けるなんて事もせず済み、本当に見つけてほしくなかつたのか、マットの間に挟んであったそれを見つけたまでは良かった。

本人に返そうかと考えて適当に歩いていて、ふと、しかし他人からしてみればようやくか、といったタイミングで、とても重大なことに気がついた。

（あれ、これ直接返したら、私色々拙くない？）

スタンドが使える使えないに関係なく、この学校に詩桜の味方となる人物は皆無に等しい。

数少ない理解者が居るものの、この時間ではその多くが帰っているだろうから、おそらく皆無といっても良いほどだ。

そしてそんなタイミングで

「あ」

「え？」

これの持ち主であろうその生徒にバツタリ会ってしまった。

内心、絶対面倒なことになると思いながらも、以前タロット占い

をされた結果の中でなんとか理解できた言葉を今更思い出せた。

『気をつけたまえ。君は間違はなくハプニング体質、要は厄介事を引き寄せやすい人間だということだ』

せめてもう少し早く思い出せるように説明してもらえなかったんだろうか、正にそう思った矢先、

「それ、どこで見つけたの」

「は？え？あ、えっと、体育倉庫……かな、アハハ」

あはは、と乾いた笑いを続けながら、この携帯押しつけるように返して青のクウガの力少し使って逃げちゃおうかと思っっているあたり、かなり追い詰められている。

そんな詩桜の内心を無視するように、対面している生徒はすたすたと、しかも無表情で近づいてくる。

（神様！私はそんな悪いことしましたか！？）

心の叫びは容易く無視されたのか、近づいてきた生徒は相変わらず無表情のまま、だが何かあるのかじっと詩桜の顔を見つめている。

悪いことしてないのに、悪いことをしてしまったような気分になっている。詩桜に彼女は告げた。

「返して」

うん、と情けない声しか上げられず固まってしまった詩桜を無視するように再度、

「私の携帯、返して」

二度目の言葉で、ようやく動けるようになり、ぎこちない動きながらも携帯電話を返す。

のちに詩桜は語る。本気でとっとと押しつけて逃げた方が良かったような、良くなかったような、どっちなんだろう。と。

返すちょうどその時、相手の生徒は詩桜の手を直接握りこんで、そう、と一言言った。

その瞬間から、何故か詩桜の頭の中に警鐘が響き渡る。

ニタリ、と笑う目の前の少女が、何故だか異様に恐ろしい存在に思えた。

「わたしね、スタンド能力はないけど、面白い力はあるの」

「へ、へえ……」

はたして、今自分は普通に会話ができているのだろうか。

無性に口の中が乾いて仕方がない。逃げたいのだが、何故か逃げられない。

「人は、サイコメトリーって言うんだけどね」

「へえ、さいこめとりっていうんだすごいねそれじゃわたしはこれ」

詩桜は逃げ出した！しかし腕を掴まれた！

何で助けた人に追い詰められないといけないんだろうと思いつながら、誰か本気で助けてと願った。

しかし現実是非情である。不思議と誰かが来る気配すらない。

「どうして逃げようとするのかしら。お友達になりたいだけなのに」

「記憶覗こうとする奴から逃げるなどか無理があるよ！っていうか友達……え、友達？」

あれ、友達って記憶覗いてなるようなもんだっけ。あれ？何か違うような気がするんだけど。

一応、どんなにスタンドが広く知られるようになったとはいえ、記憶を覗いてお友達なんて事はない。

なので、記憶を覗いてお友達とか絶対無い、と断言してもよいのだが、迷いが出る辺り相当追い詰められている。

言い出すほうも言い出すほうであるが。

「大丈夫よ、もう覗かないし、覗いたのも元は貴女がどうして携帯を持っていたのか知れたかっただけだから」

「そうしてもらえらるとつても助かる」

やっと聞けた常識的な言葉に安堵して、何とか言葉を返す。

初対面の人間と会話して非常識な言葉のほうが多いと言うのも随

分と問題がありそうだが。

「それで、友達になつてくれるかしら。同級生の音城詩桜さん」

「あ、うん。いいよ」

その言葉に対して、ため息を吐かれるのを見て、変なこと言つたかなと考え込む。

対面している彼女からしてみれば、覗いた側が言うのもあれだけど、ここは普通断るとかするだろうと思つていたのだ。

おまけに、互いに名乗りあつてもいないのに、こちらが名前を言ったのだからもう少し疑つても良いだろうに。

まあ、対する詩桜が名前の方は“クウガ”がバレた時点で一緒に分かつたんだ、程度にしか思つていないし、友達になつてくれるならいいや、と思つているのだが。

とはいえ、今は心を読んでもない彼女がそれが分かるはずもなく、あつさりとは快諾する詩桜を見て、呆れ果てたのだ。

「私の名前は九条縁よ。縁、と書いて縁と読むのよ」「んー、分かつたー」

急にぼやつとした空気で返事をした詩桜に対して、何があつたと言わんばかりの表情を出す縁。

先ほどまでの詩桜の状態を余所行き、外面だとするなら、今の詩桜は身内に見せるような気を許している状態だ。

その変わり身の早さというか、あまりにもあつさと気を許すのに驚いた縁だが、ああこれが彼女なんだと納得することにした。

ほんの少しだけ覗いた記憶だが、理論や理屈よりも、その場で感じた勘に従うことが多い。

ならば、自分は気を許しても大丈夫だろうと感じたのだ。そう思うことにした。

こうして、音城詩桜と九条縁は友人関係を結ぶことになった。

この後、二人は様々な事件に巻き込まれたり、徐々に広がる交友関係から事件を持ち込まれるようになるのだが、今は全く関係のない話だ。

なお、ここで二人して気づかなかつたある過ちについて訂正しておく必要がある。

九条縁の能力。それは実はスタンド能力であるということだ。

詩桜も精神的に追い詰められている状態で聞いたので、ろくに詩桜の記憶に残っていないが縁はスタンド能力がないと言いはしたが、見えないとは言っていない。

更に、縁がモノや人に触れれば記憶が覗けるのはスタンドが広まる以前からであつたし、自身のスタンドは外に出ないタイプであつたため、自分がスタンド能力者だと自覚が無いだけの話だ。

“スタンド使いは惹かれあう”。しかし、現状スタンド使いが大半を占め、スタンド使い同士邂逅が珍しいものでもなくなった今、このように変り種の二人が出会つたのは偶然だろうか。

それとも、“スタンド使いは惹かれあう”という言葉通り、変り種のスタンド使い同士が出会つたのは、必然であつたのか。

それは……誰にも分からない。

ただ、今分かることは一つだけ。

頑張つて誰かに笑顔を与えようとした少女が、友達を得た。ただそれだけだ。

出合い方に難はあるが。

t o b e c o n t i n u e d . . .

登場スタンド：サイコメトリー

本体：九条縁

スタンドタイプ：一体化型

スタンドパラメータ：

破壊力 - なし    スピード - なし    射程距離 - なし    持続力 - A    精

密機動性 - A    成長性 - A

能力：

触れたモノ、もしくは触れた人物から記憶を読み取る能力を持つ接触により能力を発動できるスタンド。

ただし、縁本人にこの能力がスタンドであるという自覚が全くないため、スタンドとしての機能は一切ない。

意識することで相手の記憶を読み取る能力が発動するが、スタンドの具現自体は常時行われている。

とはいえ、具現した所で身体に何か変化が出るわけでも、詩桜のように変身が出来るわけでもない。

外見的にも、内面的にも一切の変化が見られないため、スタンドが発現していると誰も分からない。

読み取れる記憶は、本人が記憶していること    要は“覚えている”記憶であり、忘れていたり、深層心理までは読み取れない。

物から読める記憶も、その“物”を持っているときに何を考えていたか、を読めるだけでそれ以外の思考までは分からない。

あとがき

縁の能力が反則気味ですがまず一言。ジョウシキハナゲステルモノ

！（キリッ）

スタンドに常識は通用しません。もつとも、“超能力を視覚化したもの”がスタンドであることから考えたら、本当に反則ですが。次。詩桜は“クウガ”を使って戦うことは嫌いますが、単純に使うことで誰かを助けることに嫌悪は抱きません。

なので、例えば高いところに飛ぶ必要があれば、“青”の力を普通に使いますし、今回のように“緑”の力を使うこともあります。

第1話で“赤のクウガ”に変身していたのも、間に入って周囲に被害が出ないようにするのに都合が良かったから、です。“紫”だとスピードが落ちるので。

詩桜にとって、“クウガ”は戦う力ではなく、誰かを助けるときに使う手段の一つ、であって、必要な時以外は絶対使わない、とは考えていません。

P.S.

実は小説投稿が初めてなので、気づいてなかった馬鹿なことがありました。

にじファンって、総合評価の下にお気に入り登録件数が表示されるんですが…

初回投稿時に、総合評価2ptで下にある1件ってのがお気に入り登録じゃなくて、評価してくれた人の数だと思ってました。

で、今回投稿する際に、総合14ptに対して、2件ってのを見てあれ、こっつて評価得点最高5点だよね、と思って見直して、やっとお気に入り登録ってのに気がつきました。

初回投稿時に登録してくれた方、ありがとうございます。それと本当にごめんなさい。

## ネタ話1 (前書き)

適当に思いついたネタの詰め合わせ。

J O J O っぽくもなく、クウガっぽくもない。

そんな話でよければどうぞ。

## ネタ話1

ひとりじゃない

校門前で絶望している詩桜。時間は10時。

「あら、詩桜。何をしているの」

がばっ！と擬音でも出そうな勢いで顔を上げると、縁がいた。

ああ、仲間だ！詩桜は嬉しくなった。

「あら、貴女今日は土曜日なのに学校に用事でもあるの？」

あれ？と思い、そういう縁はどうなのかと聞いてみた。

「私は単に外に出るのに着たい服が制服だっただけよ」

実の所、こつちもうつかり平日と間違えて出てきたのだが。

しかし縁、顔を引きつらせながらも何とかごまかそうとする。

「嘘つくなよ！思いっきり学校指定の鞆持ってんじゃないかよ！」

が、ダメ……！二人して絶望する。

土曜日、二人とも9時50分に起きて両親の制止も聞かぬままに

ダッシュ。

そして、とぼとぼと帰る。

そんな間抜けな出来事が何だか哀しいけど、少し嬉しい詩桜と縁でした。

やきもちゆかり

(縁が最近非常に怖い目で見てきます)

詩桜は追い詰められていた。

(何か、凄い殺気が籠ってるんですけど、私何かしたか!?)

縁に聞いても、さあ、としか返事がこない。

目がとつても死んだ魚のような目だから、非情に怖い。

詩桜には、全く心当たりが無いのだが。

後日、五代に焼きもちを焼いていたことが発覚して、むくれる縁に優しくする詩桜でした。

あいつらこわい

実の所スタンド使いである縁だが、自分がスタンド使いであると言つ自覚もないためか、スタンドが使えない人間として蔑視されていた。

その彼女と、一番の嫌われ者であつた音城詩桜が友人関係を結んだとしても、誰も興味を抱かなかつたのだが……

クラスの委員決めで誰もなりたがらなかつた風紀委員に、詩桜と縁が“無理矢理”推薦されたときのことだ。

二人とも、同時間に同じ事を教室で言い放つた。

「私で本当にいいんですね？」

何を言ってるんだと、馬鹿にした人間は居れど、それを相手にしようとしたものは居なかつた。

そして、二人して風紀委員になつたことを知りニタリ、と隠れて笑つ詩桜と縁。

詩桜は、五代の影響もあり基本的に皆笑っているのが好きなのが、一条の影響もあつてか不正は許せないタイプだ。おまけに独走型で手段も選ばない所もそっくりだ。

対して縁は、割とそんなことどうでも良いが、決められた役割はきつちりとこなすタイプだ。まして、詩桜は生涯で初めての友人。これだけでも十分本気で動く理由になる。

そんな二人が組んで風紀委員なんてするのだから、校内風紀が改まるどころか、意外と出てくる生徒会の不正やら教員の不正までも

暴いていた。

おまけにこの二人、一人はサイコメトリーでおおまかな状況証拠をつかんで、もう一人が超感覚やら身体能力で不正の証拠をばっちりゲットする。そんな役割が出来ていた。

スタンド使いでもない二人が、スタンドでも使えないと出来るわけもない証拠を掴むため、一時期偽証拠として疑問がもたれたが、真実嘘偽りの無いものと判明。

どうやって証拠を掴んでいるんだと調べようにも、事前に詩桜の超感覚に察知されて、何か特殊なことをしているように見えない。寧ろ地道な行動をしているところしか分からない。

そして、二人の調査を諦めるようになって、ただ一つの言葉だけ残った。

“ あいつら可愛い ” と。

しおりんゆかりん

「 し、しおりん 」

縁がぶっ壊れた！詩桜が保健室に飛び込んで唐突に叫んだ。

なんでも、縁が突如自分のことを「しおりん」と呼んだという。

一応、この保険教諭は以前から詩桜に手を貸してもらっていることもあってか詩桜と仲がいい。当然、数少ない理解者の一人だ。

だが彼は冷静に言い放った。

「 いや、それここに運んでも治らないから 」

「 えー！ 」

保険教諭は困った。詩桜も困った。だが、縁はもつと困った。

縁としては、もつと仲良くなりたいたいと思って、茶目っ気を出して呼んでみただけなのに、この反応である。

困るな、落ち込むなというのが無理な話だ。

別に詩桜とて意地悪をしているわけではない。詩桜にとって、縁は結構真面目な人物として映っているのだ。

詩桜の偏見が先行しているゆえの誤解ではあるが、彼女には縁が冗談交じりに自分をこんな風に呼ぶとは考え付きもなかったのだ。この辺に、友達になったとはいえ、付き合いが短いことが現れているし、詩桜が五代に及ばない所が表れている。

仮に、五代がここに居たならば、実に和やかな雰囲気です。詩桜ちゃんもゆかりん、とかつて呼んであげたらいいじゃない」と言いそ。うだが居ないのでどうしようもない。

そんな時、うふう、と唸っているばかりではダメだと自覚した縁は勇気を出して言った。

「私はゆかりんって呼んでほしい！」

間違った方向に勇気を出した結果、更にカオスになった。終われ。

ふたりはなかよし

詩桜と縁、向かい合ったパソコンを使っていかにも真剣な眼差しでにらみ合っている。

「勝つても負けても恨みっこナシだよ」

「それはこっちの台詞よ」

だが実際はマルチ対戦可能なネットゲームによる対戦をしているだけである。

観戦可能なゲームではないし、観客は一切いない、おまけに結構マイナーなゲームであるため興味を持つものはいないが、もしこの場にこのゲームに詳しい人間がいればこう言っただろう。

“ 貴様ら、このゲームやりこんでいるな！”

だが、この場にそんな台詞言いそうな人間誰一人としていない。縁の家なのだから、いなくて当たり前だが。

それから暫くして、経過は投げ捨てて結果だけ言うならば勝利は詩桜に軍配が上がった。

まあ、勝負を決めるのに双方共に相手の思考を読んだり（詩桜が気づいて反則するなどと言ったが無視）、超反応を使ってパソコンの反応速度ギリギリの入力をしたり、

傍から見れば異常なことこの上ない勝負だった。ここが縁の家でなければ二人とも何かしらのスタンド能力者と気づかれていたに違いない。

熱中が冷めると、二人は対照的になる。

縁は楽しそうにもう一度やろう！と目を輝かせて、詩桜は疲れたーと言ってソファに寝転がる。

結局そのまま寝ることが多く、その際二人とも実に満足げに寝ている。

二人はとっても仲良しです。出会いは最悪に近かったのにね。

さいきんははがへんです

「縁、最近お母さんが変なんだよ」

「奇遇ね。私もよ」

そうなったのはいつ頃からだろうか。多分、縁は詩桜を、詩桜は縁を両親に会わせたときからだだった気がする。

二人の父親は割と普通の対応をしているのだが、母は、たとえば、何故か反応がおかしい。

例えば、何かにつけて部屋に押し入ってきて

「何で掛け算してないの!？」

とか

「百合！百合の香りがしない!!」

と叫んですぐ出ていく。なにがしたいんだ。

場合によっては、可哀想な子ども扱いされて父に引っ張られていく母の姿を見るとときもある。

何故か引っ張っている父の姿に“ドナドナ”が思い浮かんだ。普通逆だろうに。

流石にこんな事が起き始めた頃は二人とも相手に謝っていたが、今ではもう諦めている。誰か母を何とかして下さい。

その様子を見て、決まって二人はこう思うのだ。

最近母が変です。とつても変です。と。

## ネタ話1（後書き）

あとがき

ネタ集。単発短編にも出来そうにないネタを集めてやってみようかなど。

時系列？そんなネタの詰め合わせに使えないものは投げ捨てていきます。

タイトルが平仮名な理由？ない。気分。

『ひとりじゃない』：いいじゃない。横に誰かいれば大丈夫だよ。

『やきもちゆかり』：五代さん大好き詩桜。それは分かるけど縁のことも構って下さいいな。

『あいつらこわい』：正しければ笑顔になるわけじゃないけれど、不正は歪みの元。詩桜は歪んだ笑顔は許しません。

『しおりんゆかりん』：もっと仲良くしたいから、少しは砕けて呼び合いたいよ。でもだからって壊れたはないわ！。

『ふたりはなかよし』：二人はゲーマー。マイナー大好き。実はA C北斗やらそうかと思っただが、この話ではこの時点で2003年なんだ。出来ないね。設定上一条さん三十路入り。

『さいきんははがへんです』：詩桜と縁、二人は友達。でも二人の母は掛け算大好き。ダメだこの母親……なお父親は普通です。二人の両親が知り合ってたとか言うことありません。まだ五代さんは帰国しません。次回は初バトル回。

## 2ndMind - 光り始めるもの - 1 (前書き)

今回から各話毎にサブタイトルを更につけてみます。  
今のところとりあえず試験的に、ですが。

## 2nd Mind - 光り始めるもの - 1

2nd Mind - 光り始めるもの -

「見えない攻撃を視ろ！」

五代さんが帰国するまで後2日に迫ったある日のこと。私と縁は風紀委員の委員会に出席して帰る途中だった。

非常に頭の痛くなる委員会であった。

見回りとかしなくて良いのか、と私が提案すれば「使えない奴は黙っている」とか。

どう見ても予算使いすぎなことを縁が見つけて指摘すれば「生徒代表だから良いんだよ」とか。

ダメだ、本気でダメすぎるだろう、その考えは。

委員会の人間の大半は、何でもスタンド能力が上から数えたほうが早い人間が多く、教員でも口出しが出来ない場合が多いそうだ。

おかげで、保健室の備品に使う予算が削りに削られてねえ、と言っていた。私は保険委員じゃないんだが、何で保険委員より仲が良いんだ。

「つかさそういう世知辛い愚痴は生徒にするんじゃないよ、教員に對してしてください。私は財布の紐握ってないよ。」

「何だこの高校。今流行の問題児童って奴になるの？」

「児童というには体が些か大きすぎるし、持っている力も児童とは比べ物にならないけれどね」

縁の言いたいことは分からないでもない。

縁の家は一回見たただだが、結構裕福な家だった。何でも、お父さんが結構責任ある立場の人のようだ。

そのお父さんにべったりだった縁は、自分のやったことの責任を取る、という事はどういふことかを、短い付き合いの私でも分かるくらいに理解していた。

そんな縁からしてみれば、さっきの委員会でのことは非常に腹立たしいことなのだろう。

「あ、縁何か落としたー」

屈んで落ちたシャーペンを拾う。どうやって落とすんだらうこんなもの。

それと同時にもの凄い音と共に校舎の壁がへこんだ。

咄嗟に身構えて周囲を見渡すが、何も見えない。スタンドすらも、だ。

縁の落としたシャーペンを拾っていなければ、あの謎の衝撃を喰らっていたのは自分だったかもしれない。

その恐怖もあるし、見えない相手が危害を加えてくるかもしれない不安は恐ろしい。

瞬時に、人目を気にしながら“緑のクウガ”の力を少しだけ使って、見た目は変わらないまま感覚を鋭くする。

これならば、姿を消していたとしてもある程度は分かるはずだ。

それが幸いしたのか、どうなのかは分からないが、何か無性にこの場から動かないといけない気がした。

それを躊躇せず信じて、縁を押し倒して一緒に伏せる。その数瞬後、何の気配もなくやはり壁がへこんだ。

余りのことに一瞬呆れる。何故。そう思っても事態が変わるわけではないが、流石にそう思わざるを得なかった。

何も無い、誰もいない、なのに壁がへこむ。これが、校舎の壁をへこませて驚かそうというだけなら、まだ許せる。一応、私にはされる覚えがあるのだから。

だが、それに縁まで巻き込んで、下手をすれば縁が攻撃されるかもしれない。

一瞬黙考し、構える。

「ダメよ」

そこで、縁に止められた。

「どうして!」

「止めておきなさい。誰の目があるか分からないわ。それより、ここは少々開けすぎね。射線が通りにくいところに逃げましょう」

縁は、明らかに私より冷静で、戦いなれているようだった。

本当なら私が前に出て誘導するべきなのだろうが、事あることに縁に注意されて、結局は縁の誘導に従って移動することになった。私もこんな出来る女になりたい。

「で、視聴覚室?」

「そうよ。早くカーテン閉めて。少なくとも、相手から見えないようにすれば相手も少しは攻撃しにくくなるはずだから」

電気も消して、カーテンも閉め切って、暗闇になった教室は静かだった。

見つかりにくいように隅に移動した縁が私に小声で話しかけてくる。

「今のうちに变身して。相手が直接乗り込んでくれば暗闇に引きずり込んで倒してしまえば大丈夫よ」

まあ、それなら見られなくてすむから良いんだけど。

続けて、縁は沈んだ声で言ってきた。

「詩桜が誰かを殴るのが嫌なの、分かってるから、注意を引き付けさえしてくれれば私がやるわ」

そう言った縁の口を軽くふさいで、私は返した。

「やるよ、私がやる。殴るのは嫌だ。だけど私が躊躇って、それで縁が傷つくのはもっと嫌だ」

でも、と前置きをして

「まずは相手の目的を考えよう。物を壊す能力なら、脅す目的で、私が変わ身しなくても対応は出来る」

「そうね。でも、あれがもし人も攻撃できるようなら、確実にこちらに危害を加えようとしていると判断できる」

そのまま沈黙。

縁に、目的を考えようと言いながら、しかし私の頭は全く他のことを考えていた。

それは、攻撃方法。

二度目の攻撃の瞬間。咄嗟に直感に従って回避したが、目に見えない何かを感知すら出来なかった。

よって考えられる可能性はアレが攻撃だと限定すれば少なくとも二つ。

一つは、多少鋭くした超感覚では捉えきれないような、何か想像の付かない様な遠隔攻撃。

もう一つは、遠く離れた場所を直接殴る。

二つ目の考えは、余りに馬鹿げた考えだが、中学の友達にそんな馬鹿なスタンドを持っていた奴がいた。

“視界内の人物、あるいはスタンドをスタンドで殴る能力”。物体を殴ることは出来なかったが、それでも知った当時は驚いたものだ。

そこで、縁の手が私の口を覆った。

「息が荒くなっているわ。緊張しているのは分かるけれど、し過ぎると頭が回らなくなるわ」

そこでようやく自分の呼吸が気づかないうちに荒くなっているのが気が付いた。

スタンドバトルで相手の攻撃が分からないときってハアハアいうのってお約束だよな。

みたいな事も同時に頭を過ぎった。……何か、電波受信したけど、嫌なお約束だな。

「で、攻撃方法に予測は付いた？」

暗くて見えないはずなのに、まるで見えているかのように縁は続けて言った。

「馬鹿ね、さつきは付き合っただけだけど目的なんて考えたって現状意味がないわ。それよりも、相手の手段を検討したほうが建設的

違う？」

「なんか、私は一生縁に勝てそうにない気がする。」

「だからこそ思う。何とかしてこの状況を抜けよう。」

縁に今の所考え付く相手の攻撃手段を話そうとして

ドガン、とドアが吹っ飛んだ。

そういえば、校舎の壁へこましてもいるから、思い切り器物損壊いけそうだな、と冷めた思考が出てくる。

が悠長な考えは即座に振り払う。飛んできたドアがこちらに向かってきているため、咄嗟に腕だけ“紫のクウガ”の力を完全に引き出して弾き飛ばす。

これで軽くへこんだだけですんでいたドアに止めが入った。許せ、全てはドアを吹っ飛ばすなんて行儀の悪い奴のせいだ。

そして瞬時に変身を解除。同時に少しだけ“緑”の力を引き出して感覚を鋭くする。

今度はもう一つのドアが吹き飛ばす。それはこちらに飛んでこなかったのだが、何で攻撃しているのが全く察知できない。

確認できているのは、物に対する攻撃のみではあるが、先ほどのようにドアを飛ばされればそれに巻き込まれた側はたまったものではない。

「縁、あの吹っ飛んだドアから読み取ることって出来そう？」

「我ながら無茶な発想をしたものだと思うが、正直攻撃方法を確認できる手がそれ位しか思いつかないのが現状だ。」

「……どうかしら。あの攻撃がドアに直接触れたことによる結果なら、読み取れそうだけど」

初めて知った。そんな条件が必要だったなんて。

「ああ、そういえば初めて会ったときも携帯触ってたし、同時に私の手も握ってたな。」

「じゃあ却下だ。あれが触った結果かどうかなんて考えるまでもな

い

「でも、このままじゃ埒が明かないわ」

縁には聞こえていないのだろう。カッソ、カッソと音を立てながら歩いている音が聞こえる。

まだ、距離はある。

逆に考えれば、距離があったとしても、最低でもドアを吹き飛ばすだけの攻撃は出来る、ということでもある。

つまり、今相手に捉えられた場合、一方的にやられるのはこちら、ということだ。

だが同時に分かることもある。

今、私と縁は教室の隅にいる。ピンポイントで攻撃されれば、逃げることは難しい。

だが、それをしようとしない。それは、しない、ではなく、出来ない、のではないか。

わざわざドアを吹き飛ばすなんてことをしたのも、ドアを吹き飛ばすだけの理由があったはずだ。

ここに私達がいるかどうかの確認？……いや、もしそうならそんなことせず押し入ってもいい。私達は“スタンド使いではない”のだから。

おまけに、カーテンを閉め切って真っ暗にしている視聴覚室。追う側からしてみれば、誰か隠れていると判断するには十分だ。

ドアを吹き飛ばすだけで、ゆっくりと、焦らす様に音を立てながら近づく必要なんて全く無い。

なら、物体に対してしか何も出来ないのか？だとしてもそれを確認するためだけに身を乗り出すなんてリスクが大きすぎる。

壁をへこました攻撃にしろ、ドアを吹き飛ばした攻撃にしろ、あれが本気ならいい。手加減してあの結果なら、物体以外にも出来るなら、何の対策もなしに動くには危険すぎる。

どうする、音城詩桜！考えろ、この状況を打破できるだけの一手

を

！  
！

## 2nd Mind - 光り始めるもの - 1 (後書き)

登場スタンド：????? (作中名前未出)

本体：???? (作中名前未出)

スタンドタイプ：近距離パワータイプ

能力：

詩桜の中学の知り合いのスタンド。

“視界内の人物、あるいはスタンドをスタンドで攻撃する”能力。人型。

詩桜が少し勘違いしているが、殴るだけでなく蹴ることも可能。道のスタンドによる直接攻撃をするしかないという点に変わりはないが。

ただ、この能力により離れた場所にある“物体”を攻撃することは不可能。

また、“視界内”というよりも厳密には“見えている”必要があるため、J・ガイルの“ハンゴドマン”のようなスタンドの場合、この能力で攻撃することは出来ない。

物体と一体化しているスタンドの場合は、物体ではなくスタンドと解釈されるため、この能力により攻撃が可能。

なお、“ジャステイス”などにより、操られている死体は物体扱いになるが、吸血鬼は人物扱いとなる。

この違いは“スタンド”が使えるか否か。吸血鬼はスタンドを使うことが出来るので、分別上人物扱いとなる。

あとがき

詩桜の考えは五代とは違うけれど、あくまで詩桜は五代に憧れてる

人間なので、全く同じ考えではありません。

とはいえ、基本的に自分から戦いたい、という姿勢はないので、仕掛けてきて戦う以外に手が無いなら戦うしかない、と考える人間です。

あと、縁は詩桜が高校に入ってから出来た初めての友人ですが、それまでにちゃんと友人がいます。

今回出てきた中学時代の友達もその一人。モデルは承太郎。ちなみに、縁はジョセフ。縁は女だけど。

じゃあ詩桜は？というと、五代雄介。

一人だけ違いますが、縁がジョジョサイドに近い主人公（知略担当）とすれば、詩桜はクウガサイドに近い主人公（真つ向勝負担当）だからです。

最後に。相手のスタンドの能力などは2nd Mind終了時に明かします。とりあえず考えてみて下さい。

学校ぶっ壊しても大丈夫なのか？一応その辺りも考えているので、大丈夫かなと。多分。

P.S.

自分戦闘描写が本気で苦手なので拙いのは許してください。

それと、クウガらしくもないし、J O J Oらしくないのも分かってるのでごめんなさい。

## 2nd Mind - 光り始めるもの - 2

2nd Mind - 光り始めるもの -

（納得できないなら不退<sup>さが</sup>らない）

通常、スタンドバトルは精神の勝負となる！

精神の強さは、九条縁のように窮地のときに如何に冷静でいられるか

五代雄介のように、夢の為、危険を顧みず、己の身が異形に成るとしても、信念に従い走り続けられるか

一条薫のように、特別な力を持たずとも、異形に立ち向かえるか

様々な強さがあり、十把一絡げに優劣はつけ難い。

ならば ならば、音城詩桜の強さは何か ！

窮地の時にこそ冷静である強さはない、己の身が異形に成る恐怖はない、特別な力を持たぬ者の勇気も得られない。

それでも、あるのだ。音城詩桜には ！

それが、それこそが、例えばスタンドであったとしても、音城詩桜が“クウガ”で在れる強さなのだ ！

カツン、カツン、と無機質な音が憎らしげに、テンポ良く聞こえる。

考えていられる時間は、恐らく自分が見積もっているよりも遙かに短いかもしれない。

集中する。目を閉じて、思考をクリアにする。

相手がこちらを攻撃している手段。逃げ回っている理由はそれだけだ。

ヒントは少ない。へこんだ壁と、吹き飛んだドア。たった二つ。

だが、この二つだけが与えられたものだ。これ以上は恐らく、身の危険と引き換えだ。

ここまで考えて、足音が止まった。

……ぞくり。怖気が走った。

縁を抱える。腕を制服で隠したまま、変身。“赤のクウガ”の力を開放して窓を割って飛び降りる。

3階。飛び降りれば普通タダじゃすまない。そんなことは承知の上。

片腕で縁を抱えたまま、すぐ下の窓を蹴り割って、窓枠を引っ掴んで無理矢理部屋の中へ転がり込む！

瞬間階上で轟音が響く。想像したくもないが、あそこに居座っていたらとてもじゃないが、今頃縁に睨まれる程度じゃすまなかった。

上の階で何が起こったか確認すべきなのだろうが、流石にそんな危険を冒す気はさらさらない。

おまけに、“緑”の力で確認して分かっているが、上の階のど真ん中に居座っている。

これで、嫌な事が更に二つ分かった。

まず一つ。他の足音が聞こえない。つまり、今現在本当に誰もいない、もしくは来ようとしていないということになる。

大体、宿直とかで最低一人は教師が残っているはずなのだが、前者ならば襲撃者が教員である可能性が非常に高い。

後者であれば、教員がこの事に対して目を瞑ることにしているということになる。

いずれにせよ、結論としては助けがこない、ということだ。

次にもう一つ。現在最も憂慮すべき問題がこちらで、さっき聞こえた音から察すると、相手の攻撃力は相当なものだといえる。

それがどの程度のものなのか、実際見ていないから分からないが、今までの壁をへこませたり、ドアを吹き飛ばす程度など目じゃないだろう。

多分、その気になればこの床まるまる落とすくらいはしてしまえるだろう。それをすぐにしない理由は分からないが。

もしくは、しないのではなく出来ない、か。

「詩桜」

縁が声をかけてくる。

「私を囿にしないで」

一瞬呆ける。いや、普通逆だ。

私なら、いざとなったら変身して逃げるなり、耐えるなり出来るかもしれない。

「けれど、縁は

「信じなさい」

真直ぐ見つめられる。

「それに、本当にピンチなら助けてくれるって、信じているわ」  
そして親指を立てて、

「大丈夫よ。だって、貴女がいるもの」

サムズアップ。

そうだ、迷いは捨てよう。本当に危険な時には、躊躇わずに縁を守ろう。

だから、

「そうだね、大丈夫だよ」

サムズアップを返す。

「私が守るよ。友達だから」

教室の出入り口に向かって二人して歩く。

「けれど、向かう出入り口はそれぞれ違うもの。」

校舎の形状は記憶している。振り返れば、躊躇えば、その分危険になるのは縁の方で。

お互い顔を合わせて頷きあって、背中を向けて走り出した。

“青”の力を少しだけ引き出して、走る。

階段は飛んで降りて、更に走り、宿直室へ向かう。

居ないなら居ないで良いし、居たら居たで問題にすれば良い。

単純に確認しに行くだけだ。

走った勢いを利用して引き戸に手を引っ掛けて扉が止まる。

鍵がかかっている。探している暇なんてあるわけがない。

“赤”の力を引き出してドアを蹴りぬく。

“緑”に切り替えて中を視る。誰も居ない。

轟音。部屋から飛び出し、更に走る。

詩桜が下に降りていったのは見えた。

誰も居ないかどうか確認しに行ったのだろう。

走りながらも思う。自分が居なければ、恐らくもっと早く片が着いていたのではないかと。

詩桜だけなら、自分の身を自分で守ることが出来る。でも、九条縁という戦う力がない人間が居たから、あそこまで悩んでしまったのではないかと。

だからこそ、足手まといは嫌だった。

生涯で、自分の力を知っても、あそこまで気を許してくれた友達を、苦しめるのは嫌だった。

階上で、相手を見つける。詩桜は今頃、鍵のかかった宿直室の前に居ることだろう。

何せ、教員が襲撃者だったのだから。全く、この学校はスタンド能力者でないものがとことん嫌いらしい。

「あら、随分と鋭い目つきですね、先生」

「あああ、全くだ。いけない子だ。本当にいけない子だよ君達は」  
名を覚える気もない教員の一人。あからさまに、スタンド能力を持たない者を蔑視する者だ。

「無能は無能らしく有能な人間の踏み台になるべきなのにねえ！」  
すぐ横の床がえぐれる。本当に、本当にどうしてこんな事が起きているのか全く理解が出来ない。

詩桜が今まで回避できた理由が分からない。

「生意気だよ、本当に。気づかないうちに音城だけボコボコにしよ  
うと思ったのに、君まで巻き込んでいる。」

本当に、音城って奴は生意気で駄目な奴だ。駄目なら駄目で大人  
しくしていればいいのに、本当に生意気だ」

「では、私は違うというのかしら？」

詩桜のことばかり悪く言う教員に腹が立って、言い返す。

「当たり前だろう。君の立場は知っている。教員だからね。」

そんな君の事を知れば、誰だって君を認めるさ」

聞いて損した。つまらない。

立場？そんなものが何だというのだろう。

ああ、そうか。そんなものしか見えないから、詩桜のことが分か  
らないんだ。

「だから、君を傷つけるのは心苦しいが、痛い目にあってもらうこ  
とにした。」

安心したまえ。後で先生がちゃああと、『音城詩桜が九条縁  
を傷つけました』と証言してあげるさ」

下種が。身を翻そうとして、逃げ道をふさぐように床が再度えぐ  
られる。

そのまま勢いあまって床に倒れてしまった。

せめて、と睨み返せば、胸糞の悪いニタニタとした笑い顔。

頭が回らない。怖いからじゃない。怒っているから。

ここで私があの子に何かされれば、社会的に信用のある教師とい  
う立場を利用できる方が信じられるだろう。

恐らくは、校舎の傷も詩桜がしたことにしてしまうのだろう。ど  
うやってかは分からないが、何か考えがあるのだろう。

「さあ、鬼ごっこもおしまいだ」

後ずさる。ああ、詩桜に息を荒げるなど言ったのは私なのに、息が荒いのを止める事が出来ない。

思わず、目を閉じた。

そして、聞こえた。

「超変身!!」

詩桜の声が。

音城詩桜の精神の強さ。それは、誇りでも、信念でも、勇気でもない。

“ 納得できる生き方をする ”。たったそれだけだ。

だが、それがとても難しいことを、詩桜は知っている。

世界は、理不尽が多くて 笑顔を守った人が、笑顔を失って

世界は、悪意が多くて その人が残したものを、悪用しようとした誰かが居て 。

それでも、世界はそれだけじゃない 友人のために、涙を流した優しい人が居る ことを、詩桜は知っている。

憧れた生き方が難しいと知り、諦めかけた生き方を、尚目指すと決めたその心は、まだ未熟だが、黄金の光を放っていた。

縁目掛けての攻撃を受け止めた詩桜の姿は、受け止める際には既に変身を終えており

“ 邪悪なるものあらば鋼の鎧を身につけ地割れのごとく邪悪を切り裂く戦士あり ”

その一文を以って現された、“ 紫 ” のクウガが、後ろに居る友を守る不退の心を現すように、しっかと立っていた。

## 2nd Mind - 光り始めるもの - 2 (後書き)

登場スタンド：“紫の甲冑の戦士（クウガ・タイタンフォーム）”

本体：音城詩桜

スタンドタイプ：特殊型

スタンドパラメータ：

破壊力 - C    スピード - C    射程距離 - なし    持続力 - A    精密機

動性 - C    成長性 - A

能力：

能力者の内に宿り、“変身”させることの出来る能力を有する。

そのため、スタンドタイプ上装着型、一体化型、物質同化型の要素を持つているようなスタンド。

ただし、“変身”した姿がスタンド使い以外にも視認でき、実際に“変身”に必要なのが肉体である以上、人体と同化している物質同化型とも言える。

また、能力が“変身”であるため、必要に応じて複数形態に“変身”することが出来る。

パラメータ的には変化がないが、イメージ元である“クウガ”のタイタンフォーム同様に、パワーや防御力が上がるが、反面スピードは落ちる。

やはり同様に“切り裂くもの”を手にすれば、タイタンソードに似て非なるものに作り変えることが可能。

この際、持っているものが“変化”しているが、このスタンドの能力は“変化すること”が正確な能力。

“クウガに変身すること”というのはスタンド能力的には正確には間違いで、正しくは“詩桜がクウガの姿に変化する”であるが、詩桜が“変身”と勘違いしている。

必殺技：

カラミティタイタン

本来は封印エネルギーを込める攻撃だが、スタンド「生命エネルギー」を利用して、生命エネルギーを一時的に封じる攻撃になる。スタンドに向けて放った場合は、生命エネルギーが封じられるため一時的にスタンドが使用不能になるが、命に別状はない。ただし、直接本体（人や物体）に攻撃した場合は剣としての攻撃でもあるため、傷つけることになる。マイティフォームの必殺技である、マイティキックも同様の結果に近い。

あとがき

初っ端とかに少しジョジョ風のアレクションみたいなものを入れてみました。スタンドバトルの最中だからね。

あと、ジョジョ風な話のときは大体一人称ですがちよこちよこ視点が変わります。中心は詩桜ですが。

クウガっぽいスタンド無双は出来るかどうかですが無理。

最強主人公を悪く言う気は全くない。だが、スタンドに最強はないんだよ……スタンドバトルは相性に大きく左右されるんだよ……でもジョジョを知っている皆はきつと寛容な気持ちで無双しないことを許してくれると思うよ。

だから露伴先生みたいに「だが断る」って言わないでください。

それから、すごい今更ですが、スタンドにクウガの原子レベルでの再構成が出来るのかって思ったのでwikiとかでスタンドを調べたら……

4部にもっと凄いのがありました。『パール・ジャム』ってスタンドが。アレに比べれば、多分持ったものが変わる位は良いんじゃないかなあ。

そつえば、5部でも、老化能力を持つてるスタンドも、倒したら

戻ったみたいだから、原子だの云々って割とスタンドには関係なかったし、  
冷静に考えれば、3部でも『ストレングス』が船をスタンドで魔改造やらかしてたんだから、再構成とかいうレベルじゃないよ。  
最後に。

マイティフォームとタイタンフォームの破壊力とスピードがCで同程度ですが、  
パワプロみたく、アルファベット表記までは変わらないけど、数値的に見たら違いがあるという風に解釈して下さい。

P.S.

何故かお気に入りがちままと増えていつています。嬉しいことな  
んですが……  
あれ？増える要素なんかあった？……ネタ集の関係？この話に百合  
はないよ！

## 2nd Mind - 光り始めるもの - 3

2nd Mind - 光り始めるもの -

く無知は最大の敵く

音城詩桜は、静かに、だが確かに怒っていた。

その怒りに反応してか、変身した姿は自然と“赤のクウガ”。マ  
イティフォームへと変化していた。

その怒りの意味は一つ。誰かを傷つけるという行為を平然と行え  
るという考えに対してだ。

言葉だけでは、心苦しいと言いはしていたが、だが真に誰かを傷  
つけることが嫌だと言いながらも、それでも戦わざるを得なかった  
人間を知っている詩桜にしてみれば嘘だと分かった。

故に、心は澄んだまま、頭は冷静で、しかし烈火の如き怒りの炎  
を燃やした戦士が、そこにいた。

構える。縁が攻撃されていたから、殆ど条件反射で変身したが後  
悔はない。

あのままだと、縁を見捨てるか、縁ごと攻撃されてただじゃすま  
ないかのどちらかだ。

そんな事、嫌だ。

つまらない自己保身と友達の安全、天秤にかけるまでもない。

「誰だか分からないが、随分と変な格好だな。あれか？正義の味方  
気取りか？」

ただ、不安がないわけじゃない。依然として相手の攻撃の手段が分かっていないことに変わりはない。

だからって、何もしないでいられるわけがないんだ。何も分からなくなっただって、やらなきゃいけないんだ。

「ま、相手が誰だって負けるはずがないんだ。このスタンドを見て絶望すれば良いさ、絶対勝利の手ファイブス！！」

言っただけで出てくるのはたった一本の手。だが、侮るわけにはいかない。

“スタンドはシンプルであるほど強い”。スタンドの強さは能力だけで決まらないことを示す言葉だ。

その手を適当に振り回したと思えば、左右の壁が突然音を立ててへこむ。

「見たか？見たよな？このスタンドがあれば、何だって何処だって壊せるんだ。お前なんてあつという間に壊してやるよ！」

スタンド体の手が振りかぶる。予備動作の大きさに救われ、攻撃がくるまでに“紫”に変わる。

ダメージは思ったよりもない。もし本当に“壊す”能力であれば、もっとダメージが来ていてもいいはずだ。

つまり、あれは“壊している”んじゃないくて、別な何かによって“壊す”という結果を出しているだけなんだろう。

とはいえ、全く効かないわけではないし、後ろに縁がある以上迂闊な動きは出来ない。

「ダメだなあ、お約束だろう？ヒーローは絶対悪役に負けるってのは。」

まあ？お前が負けちゃったら社会的に抹殺してやるから二度と立ち上がれないだろうがね」

狂ったように笑い出す。それに合わせるようにスタンドの手が出鱈目に振り回されて、やはり出鱈目に壁やら床やらが壊されていく。

「つとに、どおしてこうダメな連中はこの天才の計画を邪魔ばかりするんだろつなあ」

独り善がりなことを言う。というよりも、本当の天才が立てた計画ならダメな人間に潰されて文句をいうような計画にはならない。

本当の天才が計画を立てたなら、ダメな人間程度じゃどうしようもないか、ダメな人間が潰しても問題ないかのどちらかだ。

私と縁が逃げ回った程度でダメになるような計画なら、立てた人間がダメだったとしか言いようがない。

と内心愚痴ったところで、状況が変えられるわけでもなく、こちらが完全に不利であることに変わりはない。

と、ここでふと気づく。そういえば、さっき“何処だって”と言っていたが、後ろの縁に攻撃は行っていない。

それは、恐らく私が遮っているからだろう。そうでなければ執拗に攻撃を向ける必要なんか無い。

だって、相手の目的はあくまでも“縁を傷つけて、それを私に押し付ける事”だ。

まあ、頭に血が上って既に手段が目的に変わっていないければ、の話ではあるのだが。

そうでなければ、もう縁に攻撃がされて、相手は逃げているもおかしくない。

そう考えると、あの攻撃はどこにでも出来るわけではなく、少なくとも視線か射線が通っている必要があるのかもしれない。

なら、もっと前に出ても大丈夫だ。そう考えて踏み込みかけて、足を止める。

いや、それも違う。視線か射線が通っていることが条件なら、部屋の中に直接攻撃を仕掛けたであろう攻撃に説明が出来ない。

耐えながら考える私に、縁が私にだけ聞こえるように言った。「私に考えがあるから、何とかしてあいつの両手を床につけさせなさい」

縁が何を考えているのか理解できなかったが、それも一瞬。直後に意図を悟る。

危険が及ぶ可能性を考えると、進んでとりたい方法じゃない。

だからってここで躊躇っていられるわけじゃない。私が離れても危険だが、このまま耐え続けても危険だし、いつかは縁に直接攻撃したかもしれない。

だったら 余力のある今のうちに、縁に危険が及ばないようにすべきことをするしかないんだ。

“紫”から“青”へ。一気にスピードを出して近づく。

スタンドの手が振られて、こちらに攻撃される直前横へ回避。衝撃を受ける。

ここで吹き飛んでは縁が丸見えになる。防御力の低い青で耐えるのは辛い、意地で耐え切る。

相手の攻撃手段に未だ見当はつかないけど、回避したってダメなら防御するしかない。

思い切り腹部に直撃を喰らった為、そこが痛む。確かに回避したと思ったのに、直撃したということは動作と攻撃範囲に因果関係はないって事だ。

中学のときに“クウガ”の力を使いこなそうと思ってやった特訓が、変な方向で活かされているのを感じた。

友達や、友達の知り合いとかに協力してもらったことが、相手のスタンドの特徴を理解していくことに繋がっている。

“対スタンド戦で頼りになるのは自分の精神力と、スタンドに対する知識とスタンド戦闘の経験だ”。

友達にそう言われて、半ば無理矢理に知り合いのスタンドの能力を暗記させられたときは本当に辛かった。

それが今になって、理解不可能な攻撃を受けてもありえないって思考停止せずに済む要因になっているのだから、人生本当に何が起るかわからない。

“青”から“紫”に変わる。腹部の痛みを感じて、ふと考えが生まれた。

さっき受けたのは衝撃だった。つまり、今まで受けていたのは“何かの理由で発生している衝撃”ということだ。

スタンド体が手であることを考えると、殴っていると考えるのが妥当かもしれないが、場合によっては“衝撃を与える”というイメージが“殴る”という行為だったという可能性もあるから断定は出来ない。

いや、殴っているんじゃないだろう。“壊す”と言ったのだからなら、あれは“壊す”要因が“衝撃”というイメージと繋がったと考えるのが自然だ。

ということはだ、あれは“衝撃を与えて破壊する”スタンドだ。そして、壊すというイメージが手になって現れたのだろう。

屈んで破片を数個拾う。馬鹿にした笑いが飛んでくるが、笑っていられるのも今のうちだ。

腹部の痛みを無視して全力で走る。スタンドの手が振りかぶる。

破片を指弾にして適当に撒く。そのうちの2、3個を直接相手の顔面に当てる。

その間にスタンドの手が振られ、発生した衝撃は全くあらぬ方向を攻撃していた。

これではつきりした。攻撃できる位置は“はつきりとイメージできている事”が重要なんだ。

人間のイメージは非常に視覚に左右される。だから、あの時廊下で壁が破壊されたとき、“私が急に屈んだせいで壁を見た”から壁が壊れた。

“視聴覚室のドアを見ていた”から吹っ飛ばすように威力が調節できた。“視聴覚室という空間をイメージできた”から、空間を壊す衝撃を発生させることが出来た。

“私という存在が邪魔になって、縁を直接攻撃するだけのイメージが出来なかった”。

そして、“よけた私をしっかりと見ていたから、捕捉しなおして攻撃することが出来た”。

細かい違いはあるかもしれないが、これだけ分かっていたら十分だ。反撃する材料は揃っている。

“紫”から“赤”に変わり、震脚を放つ。

“直接殴る蹴るなんてしなくてもいいから型くらいはやれ”と別の友達から言われて泣く泣く泣くしていた八極拳を初めとした体術が役に立つとは思わなかった。

ともかく、震脚を放つた理由は別に踏み込みをしようと思ったわけではない。“赤”の脚力と併せる事によって、床のタイルなどを粉塵にして煙幕にするためだ。

力を十分に床に加えたのを確認して、移動する。粉塵のあるところに居たままでは攻撃して下さいといっているようなものだ。

移動した先で適度な大きさの破片を数個拾い、顔を掠めるように指弾を放つ。

それを邪魔そうに睨み、破片に対して攻撃を仕掛けて破壊した。その間に、床を踏み壊し煙幕で廊下を遮る様に壁を作る。

変身している状態なら例え“赤”でも、煙幕の向こうも見通せる。両手を顔の前でクロスさせ、そのまま広げるようにして下ろす。

右足に力を集中させる。

姿勢を低くして、一直線に走る。跳んだ瞬間、待ち望んだタイミングで煙幕が衝撃で飛ばされる。

縦に一回転。それに加えて、横に捻る。

「せええりゃあっ!!」

あわや激突、そうなるほどまでに近づいて、右足をスタンド体の手に叩きつけるように突き出す。

その瞬間に右足に込めた力をスタンド体に流し込む。

極限まで威力を高めた一撃に“スタンドを封印する力”を込める。背を向け、屈んだ状態で着地する。

「あ、ど、どうして　どうして力が抜けていくんだ！何だよこの文字は！こんなの知らないぞ!!」

そう喚く教員に、変身を解いて答える。

「スタンドバトルにおいて、無知は最大の敵”。それを知らなかったから、私みたいな未熟者にやられる」

「お、音城！貴様！！」

スタンド使いだっただのか、そんな言葉にならない叫びが、唇の動きだけで終わる。

「スタンドが、貴方にとってどういうものかは知る気もありませんが……私にとってスタンドは……」

そこで言葉を切り、教師に対して指を向ける。

「見世物に出来るほど安っぽいものじゃない」

そう言い終えた時、教員のスタンドが封印され、気絶した。

ああ、なんとか終わった。

決まるまで博打だらけだった。いいところ五分の博打どころじゃなかった。

指弾が当たるの覚悟で攻撃されてたらアウトだったし、煙幕があるのタイミングで飛ばされてなかったらアウトだったし、

何より大きいのは、あの手のモーションがご丁寧に攻撃のタイミングと連動していたから助かった。

あれがもし、イメージだけで攻撃可能で、あくまで手は攻撃イメージの補助程度の意味しか持っていなかったら、連続攻撃され続けて終わってた。

本当に、運がよかった。運も実力の内とか言うけど、本当だよ。

「終わったって顔をしてるけど始まりはこれからよ」

「何で？」

心底疑問に思っただけで問い返すと、呆れた、と言っただけで息をつかれた。

正直傷つく。あれだけ頑張っただけでまだ終わってないとか鬼畜だろ。

「校舎、どうするの」

「……あ」

そつえば、スタンド攻撃だけじゃなくて、私のやったのもあるんだ。

あ、あはは……どうしよう。

「縁ー！どー！ー！ー！しよー！ー！ー！ー！！」

「あー、泣かない泣かない。一緒に考えましょう」

傍で、無駄に冷静な縁の声が聞こえているのが、この惨状が絶対に夢でも嘘でもないと際立てていて。

私は、世の中本気でままならないと思った。

……というか、これ本当に考えたらどうにか出来るんだろうか。

## 2nd Mind - 光り始めるもの - 3 (後書き)

必殺技解説：マイティキック

使用スタンド：“赤い鎧の戦士（クウガ・マイティフォーム）”

威力：改良を加えに加えて約1t程度。以前は約700kg程度。

解説：

右足に生命エネルギーを込め、相手を蹴ると同時に生命エネルギーを流す技。

当然蹴り技なので人体に当たれば相応のダメージがある。スタンドに放った場合は、後述。

スタンド体に放った場合、流し込んだ生命エネルギーにより、この攻撃を受けたスタンドは一時的に使用不能になる。

この時、相手側が“スタンドを維持する”という抵抗の意思が強ければ、当然封印されることなく無駄に終わってしまう。

浮かび上がる文字は、リント語ではなく、漢字の“封”の一字。

スタンドに放った場合、物理的なダメージもエネルギーとして換算され、封印する際の力として利用される。

そのため、蹴りの威力を高めるということは、結果的に相手のスタンドを封印しやすくなるということになる。

詩桜が回転や捻りを加えてまで蹴りの威力を高めることをしている要因である。

なお、物理的なダメージは全て封印するためのエネルギーに変化するため、スタンドを攻撃したことによる本体へのダメージはない。

ただし、スタンドが封印された場合、短ければ1分程度、長いと3〜4分気絶する。これによる直接的な生命の危険はない。

あとがき

え？縁が活躍してない？空気さん？そんなことないよ。まだ2nd Mindは続いているんだ。

実を言うと詩桜が攻撃を回避し続けられたのは偶然じゃありません。“悪寒”も実は根拠があります。

今の所は謎ですが、良く読めばある共通点を見つけてもらえると思います。……なかつたら書き忘れてます。

あと、五代さんのキックと違い、詩桜のキックは今回のような描写になります。初めのポーズは一緒なんですけどね。

ここまで違う理由は、ぶつちやけると詩桜は改造人間じゃないから。歴代ライダーの跳躍力にはとてもじゃないけど及びません。

筋力は負けてるし、だから走る速さも飛ぶ力も弱いわけで。まあ、だからこそ五代クウガが戦えないこの話で未確認などの怪人を出せない、というメタな理由にもなるのですが。

一応詩桜がどんなに頑張っても、歴代ライダー勢と戦ったら基本的なスペックの時点で即負けます。

JOJOだと、「逃げるんだよお！」とかやるんでしょうが、そもそも足の速さで負けているので逃げられません。戦う＝詰みです。それ位違う。

P.S.

6/26に公務員試験を受けるのですが、勉強してるんですが……プレッシャーに弱いので、残り1月無いことも相まって執筆速度が激低下中です。

頑張つて最悪2週に1回くらい投稿はしますが、どうなるか分からない……でも途中断念はしたくない……

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1531t/>

---

青空になるスタンド使い

2011年6月6日01時55分発行